

原 著

自家末梢血幹細胞移植患者の口腔粘膜炎に対する 専門的口腔衛生管理の効果

十川 悠香^{1,2)} 吉岡 昌美²⁾ 福井 誠¹⁾
中村 信元³⁾ 安倍 正博³⁾ 日野出大輔¹⁾

概要：血液がん患者のがん化学療法においてみられる重症口腔粘膜炎は、疼痛に加えてしばしば重篤な感染症を引き起こし、QOLの低下を招くことがある。本研究では、自家末梢血幹細胞移植患者に焦点を当て、歯科専門職による口腔衛生管理（以下、専門的口腔衛生管理）の体制を確立したことによる口腔粘膜炎の低減効果を検討することを目的とした。

平成16年11月～平成25年6月までの期間に、徳島大学病院にて多発性骨髄腫または悪性リンパ腫と診断されて自家末梢血幹細胞移植を受けた患者33名を対象とした。対象患者は専門的口腔衛生管理体制の確立前と確立後で2群に分けた。また、口腔粘膜炎の程度（NCI-CTCAE version 3）と発熱日数、臨床検査所見、含嗽剤および薬剤処方日数を調査した。

その結果、口腔粘膜炎のGrade 2またはGrade 3の日数は、発熱日数、局所麻酔薬含有含嗽剤処方日数および鎮痛薬処方日数との間に有意な正の相関を認めた。また、専門的口腔衛生管理体制確立後に自己末梢血幹細胞移植を行ったグループの口腔粘膜炎Grade 3発症日数は、専門的口腔衛生管理体制確立前のグループと比較して、有意に短いことがわかった。

自家末梢血幹細胞移植における重症口腔粘膜炎の発現は発熱日数や薬剤処方日数と関連し、専門的口腔衛生管理体制の確立が重篤な口腔粘膜炎の発現抑制につながる可能性が示唆された。

索引用語：自家末梢血幹細胞移植、口腔粘膜炎、専門的口腔衛生管理

口腔衛生会誌 69：125-130, 2019

(受付：平成30年12月28日／受理：平成31年2月23日)

緒 言

がんの治療で行われる化学療法や放射線治療は、有害事象として口腔粘膜炎や口腔乾燥を引き起こす¹⁾。中でもがん化学療法においてみられる口腔粘膜炎は、疼痛によるQOLの低下を招くのみならず、容易に全身感染症に進展してしまう危険性があるとされている^{1,2)}。

口腔粘膜障害発症機序のメカニズムは、5つの時期に分類される^{3,4)}。特に、第4期では、同時に起こっている顆粒球減少により菌血症や敗血症のリスクが高まる。これらの過程で、グラム陰性桿菌は、潰瘍の部位から血行性に広がり、局所的または全身的な感染症を引き起こす可能性がある。したがって、口腔内を口腔衛生管理に

より清潔に保つことは、グラム陰性桿菌を減少させ2次の感染リスクを軽減するのに効果があると考えられている⁴⁾。

強度の粘膜障害は口腔内の疼痛、嚥下痛を生じ、またその影響により摂食機能の低下から栄養状態が悪化し、結果的にQOLの低下をきたす。しかし、がん治療における抗がん剤の種類や用法はさまざまであり、有害事象である口腔粘膜炎の病態も多様であることから、口腔粘膜障害の実態を適確に把握し、歯科専門職の視点から患者の不安や訴えを傾聴するなどその場の状況に応じた支援を行う必要がある。

徳島大学病院口腔管理センター／歯科衛生室では、これまで細胞治療センターにおいて、化学療法を受けてい

¹⁾ 徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔保健衛生学分野

²⁾ 徳島文理大学保健福祉学部口腔保健学科

³⁾ 徳島大学大学院医歯薬学研究部血液・内分泌代謝内科学分野

⁴⁾ National Cancer Institute : Oral Complications of Chemotherapy and Head/Neck Radiation (PDQ®)-Health Professional Version, <http://www.cancer.gov/about-cancer/treatment/side-effects/mouth-throat/oral-complications/hp-pdq> (2018年12月21日アクセス)。